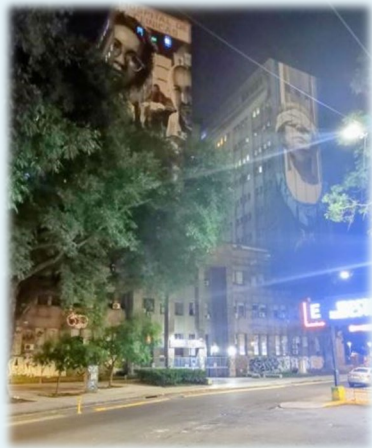




医療の現場アラカルト - Vol.7

スペイン語担当 津田さん

先日、14年ぶりにアルゼンチンに帰国をすると、何もかもが大きく変わっていて、まるで外国にいるように感じました。私の唯一の救いは、スペイン語を話せたことでした。今回の目的のひとつは、闘病中の家族の通院に付き添うことだったのですが、日本の医療に慣れていた私にとっては、全てが初めてで戸惑うことばかりでした。日本で医療を受ける外国人たちは、きっとこのような気持ちなのだろうと痛感しました。さらにその人たちには言葉の壁もあります。



ある日、病院の担当医師から「何か困ったことがあれば、メールしてください」とメールアドレスを教えてもらいました。「メールを送っても見てもらえないだろうな」と思いました。その後しばらく経ってから、誰に相談したらよいのか分からず、どうしてもなく困ったことがあり、思い切って先生へメールを送ってみました。すると驚いたことに、すぐに返事が届いたのです！ その後も私がメールを送るたびに、先生は疑問ひとつひとつに丁寧に答えてくれました。厳しい状況の中、先生の対応に本当に救われました。

日本に帰国後は医療通訳の仕事に戻り、余命宣告など辛い通訳も経験しました。日本では、医師が患者と個人的な連絡先を交換することはありませんが、診察や家族面談が終わると、患者さんやその家族が医療従事者ひとりひとりに心から感謝を伝える場面があります。文化や習慣が違っていても、言葉を超えて「患者さんをサポートしたい」という医療従事者の思いが伝わったことを感じ、胸が熱くなりました。

ある病院の夜景です。アルゼンチンでは建物へ壁画を描くのが流行っているそうです。

顧問医師紹介



この度、Medi-Way顧問医師を担当させて頂くことになりました連 翔太（むらじ しょうた）と申します。小児循環器内科医で、先天性心疾患と不整脈を専門とし、福岡市立こども病院で勤務しています。名前からお察しいただけると思いますが、前顧問の連 利博の息子です。学生時代から15年間ほど硬式テニスをしておりましたが、今は専ら鑑賞（テニス、サッカー、F1など）専門です。

昨年、勉強会の臨時講師を担当したことをきっかけにこの世界に引っ張り込まれることになりました。臨床現場で医療通訳の重要性を痛感していたところ、「母国語で説明を受ける権利」を知り、意識が変わりました。医療通訳業界は初心者ですが、勉強会や通訳士の方々との議論を通して、Medi-Wayに、医療通訳に、そして言語の壁を持つ患者さん達に貢献して参ります。よろしくお願い申し上げます。

福岡市立こども病院 循環器科
むらじ しょうた
医師 連 翔太



今月のトピックス

「いのち輝く未来社会のデザイン」

大阪・関西万博が開幕してから約ひと月が経ちました。Medi-Wayの拠点である大阪では、何かと万博の話題につながります。海外からの来場者も多く、大変盛り上がっています。病院での通訳でも患者さんの来日理由が万博ということも多いですね。今回のテーマである「いのち輝く未来社会のデザイン」は、医療にも大きく関わり、医療通訳に携わる身として興味は尽きません。すでに何度も足を運んでいる人もへ。

さて、Medi-Wayの通訳士の中には、医療以外の分野で幅広く活躍をしているメンバーがいます。多種多様な通訳に携わることで、文化や習慣などを吸収し医療にも役立つことが多く、社会貢献にもつながります。ある通訳士からは、「ナショナルデーのために来日したVIPの専属通訳だった!」、「数か国からなる大人数の視察団に同行した通訳士は自分ひとりだった〜」などなど。どのような場面でも対応できる人たちが仲間にいることを改めて実感し、心強いです。これからも万博での通訳予定があるようですが、いろいろと守秘義務もあるので、詳しい内容は聞けませんが、万博ボランティアとして医療現場に携わっている通訳士の話はいつかご紹介出来そうです♪

ところでですが、ウチの会社「よしもとwaraii myraii館」などに大型LEDを提供していたり、実はいろいろやっています! 是非来場してくださいね!

